



西郷隆盛とは

何者だったのか？



西郷隆盛と大久保利通は、幕末・維新の英傑で、この二人がいなければ明治という近代国家はやって来なかったであろう。西郷隆盛は、文政10年(1828)に鹿児島城下の加治屋町で生を受けた。下級武士の子で、当初は郡方書役助をしていたが、島津斉彬が藩主になると、その才を買われ、江戸出立の庭方役に加えられていた。斉彬は次期将軍に一橋(徳川)慶喜を推しており、西郷隆盛はその調整工作をしながら色んな人物と繋がったようだ。その一人が僧・月照。彼を伴って薩摩入りするのだが、斉彬の死後、保守化していた藩は保護せず、西郷隆盛は月照とともに錦江湾に身を投じ自殺を図っている。幸い一死はとりとめが、奄美大島へ島送りになった。

西郷隆盛は、その生涯で二度の島送り野公園に建つ西郷隆盛像は、高村光雲の作。大日本帝国憲法発布に伴う大赦で西郷隆盛は逆徒の汚名が解かれたのをきっかけに吉井友実ら薩摩出身者が計画してできたもの。铸造者の岡崎雪馨はキヨツソネのコンテ画をもとに西郷の知り合いなどに聞き、制作を進めたらしい。ところが公開に招かれた西郷の夫人・糸子は「うちの主人は、こんなじゃなかった」と発し、ラフなスタイルで犬を連れている姿を見て「浴衣姿で散歩なんてしない」と周囲の人に語ったと伝えられている。西郷隆盛の写真とされるものが世に出回り、一時は土産物として売られていた時代もあるにはあった。これとて偽物で、今ではそれが永山弥一郎の写真だとわかっている。昭和37年(1962)に大塚安子が俗にいう「群像写真」を取り挙げ、その中の一人が西郷隆盛だと発表したのが、これも聞きとりによって小田原瑞智ではとされている向きもある。このように今の世でも論争が絶えないのも彼が英傑たる所以だろう。

西郷隆盛人気は、やはり彼の人物的魅力を示す所が大きい。彼の人物的魅力を示すものとしてこんな話がある。西南戦争では臼杵(大分)の士族も戦に加わっている。薩摩軍の敗戦が濃くなった時、臼杵の老人が遣いをやり、「鹿児島県人ではないから帰ってこい」と論じた。一同が帰る中で隊長のみは残って西郷隆盛といっしょに死ぬと言い出した。「いっ

も付いており、正式には隆道なかつかというところが名乗りを聞きに来た明治政府の役人が聞こえにくかったのか、慎吾が字を説明しようと「リュウドウ」と言ったので、歴史では隆盛の弟は「西郷従道」と呼ばれている。慎吾も訂正しに行っておらず、あつげらかんとしていた。そんな大らかさがこの兄弟にはある。

もう一つ、不可思議な話を書いておく。それは、今の世に伝わる西郷隆盛の肖像画が正確には本人のものではないという話。幕末期に写真技術が日本に入ってきたおかげで多くの偉人達の顔を知ることができる。有名なものは坂本龍馬の写真。数枚ある中で知られているのは慶応3年(1867)に長崎の上野彦馬か、その弟子・井上俊三が撮ったとされる一枚だ。このように新しい技術で面白がって色んな人物がその姿を残している。だが、西郷隆盛には一枚も写真がない。顔を晒してしまうと命を狙われるから嫌だったとの説もあるが、単なる写真嫌いだったのではないだろうか。

我々が西郷隆盛と崇めている肖像画は、明治11年(1878)にイタリア人の銅版画家・キヨツソネが描いたもの。当然ながらキヨツソネは、西郷隆盛と面識がなく、弟の従道といこの大山巖を参考にして描いている。これが意外と似ているとの証言もあったためにこの肖像画がよく使われているのだ。上

めた商品が巷に溢れていた。

しかし、考えてみればそれとて変である。西郷隆盛は明治10年(1877)に西南戦争で明治政府に反旗を翻しており、いわば反乱者。それがいつのまにかその汚名をそそがれ、没後12年の明治22年(1889)には正三位を贈られているのだ。

西郷隆盛という人は、色んな意味で風変わりな人物だ。まず、我々が呼んでいる「隆盛」という名は彼の真の名前ではない。彼は51年の生涯において13もの名前を使いわけている。西郷家の嫡男として生まれた時は小吉と呼ばれ、元服すると吉之助、もしくは隆永である。流刑になって菊池源吾と変名し、帰国後、大島姓を名乗ったのは例外として、大半は西郷吉之助というのが多い。昔は今と違って諱いみなや呼び名などがあつた。西郷のそれは、名乗りは隆永で、通称が吉之助だった。明治になって新政府に名前を届ける際に吉井友実が間違えた。吉井は西郷の名乗りを忘れてしまい、「確か、隆盛だったか」と登録してしまつたのだ。実は、隆盛は西郷の父・吉兵衛の名乗りで、正式には隆永である。その登録名を聞いても西郷吉之助は「おいは隆盛でござるか」と平然としており、訂正に行かなかつたそう。ちなみに西郷隆盛の弟・従道つくだちにも同じような話がある。西郷家は代々「隆」の字を名前につける。当然ながら隆盛の弟・慎吾(これは通称)

になつているのだが、薩英戦争を経験して混乱した薩摩にはどうしても彼が必要で、盟友・大久保らの働きかけもあつて幕末動乱期に復帰。その後、歴史に名を残すほどの活動を果たすのだ。

斉彬政権下で東奔西走したり、勝海舟などの有力人物と知己を得たりしていたのでそれまでも全くの無名ではなかったが、戦でさらに名を高めた。西郷隆盛の初陣と呼ばれるのは38歳になつてから(動乱期でも戦争はないので仕方ないことだが)。禁門の変(蛤御門の変)がその舞台である。これは文久3年8月18日の政変で京を追われた長州勢が奪回を図るべく、攻め入つた事件である。ここで西郷隆盛は洋式銃隊を率いて指揮を取り、苦戦する会津・桑名兩藩を助けて長州勢を撃退している。この働きにより京に駐在していた大名家の藩士にその名が轟いたという。

今こそ坂本龍馬が幕末期の人気No.1人物といわれているが、司馬遼太郎が「竜馬がゆく」を上梓するまでは、マイナーな人物だった。現に司馬は龍馬をモデルに小説を書くことと決めた時、知人から「なぜそんなマイナーな人物を主役にするのか」と問われている。ところが同書がベストセラーとなり、内容も面白かつたのでその人気は饅登りになっていき、幕末第一級の英傑と思われるに至つた。それまでは西郷隆盛がそのポストに座っており、彼を模した貯金箱や彼を絡

しよに帰ろう」と誘う中で彼が言うのは、「お前達は隊士だから交わりが少ないが、私は接することが多かつたから彼の魅力の虜になつてしまつている」との理由。だから共に死ぬしかないと帰国を断つたそう。その言葉通り、臼杵士族の隊長は城山で亡くなつている。こういった魅力は薩摩の人達は肌で感じていたと思われる。だから城山での自刃以降も西郷隆盛を伝説の英雄として持ち上げたのだ。今、坂本龍馬が人気No.1となつているのは、少々理由づけが違うように思えてならない。

(文)ジャーナリスト・曾我和弘

